



日本モビリティ・マネジメント会議  
ニュースレター

Vol.26 ● 2012.12.31

【発行】 JCOMM実行委員会  
ニュースレター編集部  
【お問合せ】 筑波大学 谷口綾研  
大阪大学 松村研

mail: info@jcomm.or.jp

MMに関連する会告掲載希望やご意見等、  
随時受け付けております。

新年明けましておめでとうござ  
います。昨年の東日本大震災によ  
る被害の爪痕がまだまだ残る現状  
のなかで、モビリティ・マネジメ  
ントに対する期待がますます高ま  
っています。

今号は、第八回JCOMMの開  
催速報を中心にお届けします。

### イベント案内

**第七回JCOMM・仙台の「案内」**  
第八回JCOMMは二〇一三年  
七月十二日（金）、十三日（土）  
の日程で、仙台市 仙台市民会館  
他にて開催されます。

仙台市では現在建設中の地下鉄  
東西線の平成二十七年の開業を  
見据え、公共交通を中心とした、  
過度にクルマに依存しないまちづ  
くりを推進していくため、「せん  
だい都市交通プラン」を平成二十  
二年に策定しました。そのなかで  
MMに関しては、「せんだいスマ  
ート」をキャッチフレーズに、市  
民・交通事業者・企業・学校・N  
POなどと協働で幅広く、多様な  
取り組みを推進しています。

発表申し込み要領・締め切り等  
の詳細については、一月下旬を目  
処にJCOMMメーリングリス  
ト、WEBサイト等にてお知らせ  
いたします。多数の皆さまのから  
のご参加をお待ちしています。

### イベント案内

#### 平成二十四年度JCOMM賞 候補募集について

他地域の模範となるような、効  
果的なMMプロジェクトを表彰す  
るJCOMM賞の公募を、平成二  
十五年度も行います。昨年度同  
様、マネジメント賞、デザイン  
賞、技術賞、プロジェクト賞と合  
わせて四つの部門で公募・審査を  
行います。

応募要領や期日等は、一月下旬  
までにJCOMMメーリングリス  
トならびにWEBサイトでお知ら  
せします。自薦・他薦を問いませ  
るので、奮ってご応募ください。

#### 【JCOMM賞の主旨】

国内の様々なモビリティ・マネ  
ジメントについての様々な取り組

みや研究の中でも、特に優秀な取  
り組みや研究をJCOMM実行委  
員会として選定し、その実現に貢  
献した個人あるいは団体を表彰す  
る。これを通じて、モビリティ・  
マネジメントの「実務発展」と  
「技術発展」を期待します。

#### 【各賞の概要】

##### ○マネジメント賞

モビリティ・マネジメントにおける  
実務的な「二連の持続的マネジメ  
ント」の中でも、とりわけ、都市・地域  
のモビリティの質的改善や渋滞、環境  
問題、公衆の健康増進問題や都市構造  
問題などの交通に関連する諸問題の解  
消に向けて、効果的に推進されている  
一連の持続的マネジメントについて授  
与

##### ○デザイン賞

モビリティ・マネジメントにおける  
実務的なプロジェクトにおいて実際に  
使用されたマップ、リーフレットフォ  
ルダ、アンケート表等の各種ツール  
の中でも、とりわけ秀逸なデザインが  
なされた一個、ないしは、一群のツ  
ールについて授与

##### ○技術賞

モビリティ・マネジメント実務に資  
する技術の発展に、顕著な貢献をなし  
た「研究業績」について授与

##### ○プロジェクト賞

モビリティ・マネジメントの一連の  
取り組みの中で実施された「実務的な  
プロジェクト」の中でも、とりわ  
け、都市・地域のモビリティの質的改  
善や渋滞、環境問題、公衆の健康増進  
問題や都市交通問題などの交通に関連  
する諸問題の緩和に実際に大きく貢献  
し、諸問題の緩和に繋がりうる  
新規性を持ち、かつ、その完成度・応  
用可能性や取り組み姿勢がすぐれたプ  
ロジェクトについて授与

### JCOMM法人会員紹介

#### Vol.10 中央復建コンサルタンツ株式会社

弊社は、「復建」の名の通り、  
戦後の復興建設を目的に設立され  
た社団法人が前身のコンサルティ  
ングファームです。鉄道分野や  
総合交通分野をコア・コンピタ  
ンとして、MMについても積極的  
に取り組んでいます。

弊社が取り組むMMの特徴の一  
つとして、「規模の大きさ」があ  
ります。例えば、京都府において  
年間約二十万人を対象とする免  
許更新時MMに携わり、関係者の  
皆様と一緒にJCOMMプロジェクト  
回近畿圏PT調査（二〇一〇年）  
では、約四十万人を対象にワン

ショットMMを行っています。

最近では、交通だけでなく、まちづ  
くりの観点から取り組むMMが増  
えてきました。このような交通ま  
ちづくりプロジェクトでは、行政  
や交通事業者の方々をサポートす  
るだけでなく、自らが事業主体と  
してMMに取り組むことも重要で  
す。弊社は、二〇〇九年度に事業  
子会社を設立し、事業者の立場か  
らMMに取り組んでいます。

今後は、被災地において、復興  
を目的としたMMに取り組む機会  
も増えそうです。戦後復興のため  
に生まれた会社のDNAを活か  
し、これからは社会のために、よ  
り広い視点から主体的にMMに取  
り組んでいきます。



▲写真 事業主体としてMMも含めて  
取り組んだ「丹波篠山えこりん」

ニッポンのMM

第二回 「ガリバーマップ」で  
まちを「発見」して  
「共有」する取り組み

私たちの移動が及ぼす影響にはさまざまなものがありますが、CO<sub>2</sub>排出量などの「環境」や消費カロリーなどの「健康」と比べて実感しづらく、でも、とても大きなインパクトを持っているのが「まちづくり」への影響です。

その理解のための俯瞰的な視野を育み、共有化するのに便利なツールが山口県宇部市で活用されている、ガリバーマップです。

ガリバーマップは、その上に立っているとガリバー旅行記の主人公のガリバーになったような気

分になる、大きな地図です。宇部市のマップは、耐久性のある化繊生地を用いて作成したことで、テープ等を繰り返し貼ったり、畳んで持ち運ぶことが可能である点が特徴です。宇部市のガリバーマップは六畳×八畳の大きさで、眺めているだけでもまちに新たな発見があります。

モビリティ・マネジメントではさらに、マップ上の日常生活で訪れる場所を利用交通手段で色分けした模型を置いて分担率を調べたり、幹線道路への商業施設の集積や公共交通不便地域などまちの構造を示したりすることができま

す。取り組みを通じて、知らない場所や道があること、多くの人があ

ルマを使っていること、意外と近くの場所にクルマで行っていることなど、まちの地理や自分の行動、そして他の人の行動に様々な発見を促し、まちへの興味・関心を育むであろうと期待されます。

さらに、皆でマップを囲み、話しながら自分たちの行動やまちの様子を再現することで、まちへの理解を共有することにもつながります。

宇部市では、親子でのワークショップ、小中学校や高校での環境学習や地域学習、市民大学（生涯学習）での講義など、幅広い年代・参加者に対応した様々な参加型イベント・授業で活用されています。

（山口大学 鈴木春菜）



▲ 写真ガリバーマップを用いた小学校での授業の様子



▲ 写真大人対象セミナーの様子

私がMMに関心を持ったのは、一九九七年にロンドンで開催された第二十五回PTRC（欧州交通会議）でエリザベス・アンプト女史が発表された「トランプルブレンディングによる自動車交通の削減」と題した論文との出会いがきっかけでした。三つのブレンドを提唱されており、手段のブレンド、行動のブレンド、一週間といった時間単位での行動のブレンドをコンセプトにオーストラリアのアデレードでは自動車利用時間や自動車トリップ数が三割弱も削減されたことが報告されていました。まさに目から鱗（うろこ）でした。当時我が国ではTDMの概念が浸透してはいなかったものの、多くは社会実験で終わり、また、効果も限定的で、持続的な取り組みも数えるほどという状況でした。二〇〇四年には念願叶い、アデレードのアンプト女史のオフィス（Steer Davies Gleave社）を訪問したことが先日のことのように思い出されます。「人々の日常の生活についてまじじじくり話を聞き、その中から、個人個人が抱えるモビリティの問題課題が浮かび上がってくるのよ」とおっしゃって

私とMM

第4回：計量計画研究所 牧村和彦

た話はとても印象深く、今も深く心に残っています。

二〇〇五年には福岡国道様と一緒にMMに取り組み機会を与えていただき、福岡市内の商店街の空き店舗を二ヶ月間借りし、地域のMM拠点としてモビリティセンターを立ち上げました。十名ほどのスタッフと一緒に、地域住民の方々に訪問し、お話を伺うことが出来た経験は今でも自分のMMの原点として、あの当時を振り返ることがあります。

MMを経験させて頂き、仕事の仕方自体にも大きな影響を与えていることに気づくことがあります。例えば所属している会社の話で恐縮ですが、会社のビジョンを共有し、目標に向かって社員の行動変容を如何に進めていくか、試行錯誤の日々が続いています。その際、事実情報の提供や行動プランの実践など、MM技術を自然に適用している事に改めて気づくことがあります。

MMは魔法の杖ではありませんが、MMという技術を通して人々が繋がりを、皆の強い意志が住民や企業を動かしていく、動かし続けていくと信じています。初心忘るべからずで、今後も日々精進していきたいと思えます。